



# 「ガマ」の暗闇

上地 源光

六月二三日は沖縄では休日となっている。沖縄の終戦記念日（慰霊の日）で、各地で戦争犠牲者の霊を慰める行事が行われる。実はこの日は、沖縄に配置された日本軍の最高司令官牛島中将が自決した日だ。沖縄戦が終わった日ではない。

沖縄戦は、一九四五年三月二三日、米軍の慶良間上陸で開始された。日本軍の組織的な戦闘は六月一九日に終了、牛島の自決（二三日）、七月二日の米軍の作戦終了宣言、そして、日本軍の残存部隊が降伏調印をしたのは九月七日であった。

日本兵たちは、指揮命令系統を失った後も、沖縄県民を巻き込んで執拗な抵抗を続けた。「ガ

マ」と呼ばれる巨大な鍾乳洞の中に立て籠もり、昼間は息を潜め、夜になると米軍に切り込み特攻を繰り返した。

糸数にあるアプチラガマは当初は陸軍病院の分室として使われた。運ばれてきた負傷兵たちを看病したのがあの姫百合学徒であった。野戦病院となったガマには、一時一〇〇〇人近い負傷兵が收容された。米軍の南下にともしない野戦病院は解散された。重症患者は青酸カリなどを渡され、置き去りにされた。そのガマに、日本の敗残兵と逃げ場を失った住民二〇〇人以上が立て籠もった。抵抗の末、投降したのは敗戦後の八月二二日だったといわれている。この間の、暗いガマの中でおこった住民と日本兵の軋轢や悲劇を語ることはできない。

今年の三月中旬、職場の同僚とアプチラガマを訪ねた。案内板の近くのどこを見回してもそれらしいところはない。近くに食堂があったので聞くことにした。近隣の作業員や運転手相手の食堂のようだった。女性の従業員ができてガマの場所を教えてくれた。しかし、

にいかした

# 北から南から



私たちを見て、そのような格好では入れないと言った。長靴と懐中電灯が必要だし、案内人がつかなければ無理だ。ガイドはいるのかと聞いた。困った、何の用意もないし、ガイドもない。そういう人のために長靴と懐中電灯を食堂で貸している、と従業員。この従業員、こんどはタクシーの運転手と話している男性となにか相談して戻ってきた。あの人

がガイドしてくれると紹介してくれた。ガマの入り口は狭く、後ずさりでなければ入れない。一〇mも入ると懐中電灯が必要になった。足下はジメジメして滑りやすい状態だ。さらに奥に進むと鐘乳洞独特の空間が広がっていた。野戦病院の病室の跡、ここには手術室があった、ここは調理室の跡、便所はここにあった、水は鐘乳洞の底を流れる水を堰き止めて使った、と暗闇の中を進みながら、懐中電灯を照らしてガイドの説明が続いた。

みなさん、懐中電灯を消してください、とガイドの声。一瞬にして漆黒の間と沈黙の世界に包まれた。足の裏に感じる地面以外は五管に伝わるものは何もない。暗黒の中空に浮

いてしまったような、バランス感覚の喪失で不安になった。

この闇の中で、異臭を放つ死体の近くで、三ヶ月以上も息も潜め、飢えと恐怖と疑心暗鬼の人間関係の中にいた二〇〇名を越す人たち。あらためて住民を巻き込んだ地上戦の特殊な悲劇性を思い知らされた。

ガマについてのウチナンチュの思いは複雑だ。読谷にはチビチリガマがある。ガマの前に平和の像を造る運動が起こった。地元の年輩の人たちは、今更過去のことを暴くようなことはしないでくれと言った。あの時ガマで自分の子どもを殺した母親が今も近所で暮らしているのだ、と。

ガマの中で住民に自決を強制した日本兵、スパイ扱いした日本兵、沖縄県民をあの状況下でも差別した日本兵がいたことは事実だ。しかし、ことさらそのことを強調することは、今の沖縄の平和の語り部にはふさわしくない。彼らもまた戦争の被害者なのだから。とガイドは私たちを見た。

(うえちげんこう・新潟県教職員組合新潟市支部)